

## 新刊紹介

戸田山和久・出口康夫編

『応用哲学を学ぶ人のために』

(世界思想社、2011年)

鈴木 真

応用哲学という語義矛盾にもみえる題名を持つ本書は、2008年に設立された応用哲学会の会員によって編まれた本である。世界初の応用哲学の入門書として、28人の著者が各々10頁強の紙数で自分の専門とする応用哲学のトピック（だと彼らがみなすもの）を紹介し、論じている。各論考はほとんど完全に独立しており、どこからでも読むことができる。構成としては、「総説」で応用哲学について説明した後、全十章の論考が続いている。各章のタイトルはそれぞれ順に、「科学技術を問う」、「応用形而上学」、「越境する現代哲学」、「応用現象学」、「環境から生活圏へ」、「現代社会を哲学する」、「パブリック・アフェアーズ」、「市民と向き合う哲学」、「応用倫理の新展開」、「応用哲学史」となっている。字数の関係で、各章、各論考の内容を纏めて、一つ一つコメントすることはできない。

一言断っておくと、書評者はこの本の編集には関わっていないが応用哲学会会員であり、哲学者の間にはこの学会に対して冷めた視線を送る人々もいる中で、好意的な立場をとっている。学会の設立から数年でこうした本を編んで多くの人々に対して開いていこうという熱意は高く買えると思う。「【哲学者某】における……」といったタイトルの論文が多くの哲学誌に氾濫してきた日本の現状を変え、哲学者が自分で問題を主題的に考えるようにしようという姿勢には共感する。ただし、この本の諸論考においてとられているアプローチが、現実の社会における問題の適切な分析や説明や処方箋を提示することに貢献できているかどうか、つまり、本当にまともな応用哲学になっているか、という点については、疑問の余地があるかもしれない。この点についての公正な判断は、本書の中の短編によって判断するのではなく、これまでの、そしてこれからの著者たちの研究成果を検討するののでなければできないだろう。また各著

者は、様々な、時によっては相対立するような方法と前提で問題に取り組み、自分個人の主張をしているので、ある著者の論考は議論としても応用哲学の実践としてもダメだが、別の著者ののは成功している、と判明することもありそうである。

本書は入門書を謳っているが、大学の講義テキストや参考書として使えるかという点、それは難しいかもしれない。それは、内容が多岐に及んでまとまりがなく、しかも統一された応用哲学の概念や、理論体系や方法論が紹介されているわけでもない（そもそも、そんなものはない）からである。さらに、応用哲学の標準的な題材についてコンセンサスがあって、それについて網羅的に書いてもらっているというわけでもなく、索引もないので、事典としてもあまり使えないだろう。この本を読んでみたらよいのは、むしろ、哲学の（その研究者の自己満足にとどまらない）意義とか関連性について考えてみたい人である。そうした人は、目次を見て、自分の関心のありそうなトピックについての論考を読んでみればよい。各論考の最後には参考文献がついているので、さらに学びたい人はそこに辿っていける。

本書は、理詰めで話をする（はずの）哲学者の個人的な思いや感情が所々にみえるという点でも異色である。これを読んでもっとこうした哲学者の肉声をはっきり聞きたいと思った人は、同じ編集担当者（大隅直人氏）によって編集された、戸田山和久・出口康夫・美濃正編『これが応用哲学だ！』（大隅書店、2012）を手にとってみるとよいだろう。